

明治初期、「西洋眼鏡」^{せいようめがね}の盛衰

——人はなぜ覗き、なぜ観るのか——

坂井 美香

SAKAI Mika

はじめに

筆者は、これまで「覗きからくり」について研究、調査を進めてきた。「覗きからくり」とは、レンズを通して箱の中を覗き込む装置である。それは日本のプレ・シネマ史において長期間存在した視覚光学装置であり、光と影のイリュージョンを見せる。その覗きからくりに関連する収集資料の中に「西洋眼鏡（セイヨウメガネ）」と呼ばれる一群のものがある。興味深いことに、その「西洋眼鏡」は、期間限定的に雨後の竹の子の如く明治前半の資料中に現れ、ある時期を境にほとんど消えてしまう。期間が限定されているということは、その時代に社会的存在役割があり、民衆に受け入れられ、役割が終わったから消えたと考えるのだが、「西洋眼鏡」について詳細に検討する報告は管見の限りで見当たらない。

これまでの先行研究を見てみれば、「西洋眼鏡」^{せいようめがね}とは「ノゾキカラクリ（覗きからくり）」だと説明するものがほとんどである。たとえば、加藤秀俊は『見世物からテレビへ』〔1965年〕で、服部誠一の『東京新繁昌記』を引用して明治初期の「西洋眼鏡」を紹介するが、それについて以下のような説明をする。「この「西洋目鏡」⁽¹⁾とは、どうやらこんにちでもデパートの屋上などにあるノゾキ目鏡すなわち、箱の内部に照明をあてて、のぞき穴から、箱のなかの画だの仕掛けだのをみる装置のことらしく思われる。」〔加藤秀俊 1965年、p 40〕とする。すなわち、加藤は明治初期の「西洋目鏡」を、戦後デパートの屋上で見た「ノゾキ目鏡」、すなわち覗きからくりだと説明するのだが、昭和20年以降に見ることができた覗きからくりは、箱の中に組み込まれた数枚の絵が繰り替わる装置のことである。果たして、「西洋目鏡」は覗きからくりだといえるのか。

「西洋眼鏡」が「覗きからくり」の類であるのは確かである。そうではあるが、明治時代にも覗きからくりと呼ばれる見世物興行はあった。同時代に両者が存在し、違う名前呼び分けるからには違うものだとは認識する方が妥当ではないだろうか。「西洋眼鏡」について検証をする必要があ



図1 覗きからくり「女一代嗜鏡俊徳丸」（三原市歴史民俗資料館蔵）

る。それにより、日本プレ・シネマ史の一端が明らかになるだろう。本稿では、その装置と内容、役割を検証すべく研究報告を行うことにしたい。

1 描かれた「西洋眼鏡」^{せいようめがね}

「西洋眼鏡」とはいかなるものか。それは実物として資料館や個人の収蔵庫にあるわけではなく、資料の中にだけに見出される見世物興行の一種である。まずは図像に描かれたその様子を確認し、イメージを把握することにした。

しかしその前に、先行研究で混同されている箱の中で絵を繰り替え、その絵をレンズを通して見る露天興行「覗きからくり」について見ておくことにしよう。

(1) 露天興行「覗きからくり」

覗きからくりは、1600年代末に日本文化の中に現れ、江戸後期には香具師及び乞胸が寺社の境内や街頭などで演じて見せるポピュラーな愛敬芸となっていた。それはそのまま明治になっても引き継がれ、香具師集団の持ち歩く見世物芸の1つであった。図1は広島県の三原市歴史民俗資料館に保存されている覗きからくりである。その構造の詳細については、拙稿「覗きからくりとは何だろう——日本、西欧、中国——」〔坂井美香 2009年⁽²⁾〕に報告済みであるが、簡略に述べておこう。覗きからくりとは、箱の中に仕込まれた絵をレンズ付きの覗き穴から見る装置である。そして、その装置の脇に興行師が立つか座るか、説明となる歌を歌い、その歌に合わせて絵を繰り替えていく。覗き込む絵には遠近法と透かし絵の技法が用いられ、レンズと光を用いて立体的な場面を見せる。箱には複数の覗き穴があり、観客は1つの覗き穴から一組6～10枚の絵を見るようになっている。

図2は、喜多川守貞が『守貞漫稿』に描いた「覗機関」である。江戸末期の覗きからくりは、昭和まで興行に用いられた図1のものよりは小ぶりであるが、基本構造は同じである。詞書きが以下のように添えられている。

「覗機関」

のぞきからくりと訓す。京阪にては下略してのぞきと云。江戸にては上略してからくりと云。三都ともに、神祭の日或は諸佛の縁日には、社頭および寺院の境内、其他往来繁き路傍に荷ひ出し、児童に之を觀て錢をとる。

下図の如く、正面の絵は看板と云て代ることなし。背に紙張の箱ありて、此中に絵五六枚を釣り、左右二人各互に演説し、前の絵より、次第に紐を以て引き上げ、次の絵を見せる也。

前の腰に数ケの穴あり。穴には、硝子を張りたり。此穴より覗き觀る也。



図2 「覗機関」

喜多川守貞『守貞漫稿』第五卷（1837～53年執筆、1908刊行）東京堂出版1992年、108頁。

江戸にては四錢也。稀には八文の物もあり。

覗き機関の絵に専とする者は、於七吉三恋緋桜、於染久松妹背門松、於半右衛門桂川恋柵、石川五右衛門釜ヶ淵、女盜賊三島於仙、忠臣蔵。（注：原文カタカナ部分はひらがなに改めた。）

〔喜多川守貞『守貞漫稿』第五卷（1837～53年執筆，1908年刊行）東京堂出版 1992年，p 108〕

縁日や神社祭礼に出て、子供達に見せていたという。箱の中には5～6枚の絵があり、それを紐で引き上げて絵を繰り替えていた。箱の「前の腰」に幾つかのレンズ付きの覗き穴が有り、そこから絵を見る。掛けられた外題は、八百屋お七、お染め久松、桂川恋柵、石川五右衛門、三島お仙、忠臣蔵などだったという。文芸ものが掛けられていたことがわかる。

図1と図2を比較してわかるように、覗きからくりは江戸時代から大正時代まで少しづつ形や大きさを変えて大型化していった。しかし、1つの箱に複数の覗き穴があり、箱の中の絵が繰り替えられ、人は移動することなく複数の絵を見るという点は共通する。

さて、問題は以上の「覗きからくり」が「西洋眼鏡」という装置と同じなのかどうかということである。

(2) 描かれた「西洋眼鏡」

口絵や挿絵に「西洋眼鏡」を描く図像資料、引札がある。年代順に見ていくことにしよう。明治6年同好舎の興行用引札2枚、明治6年『浮世機関西洋鑑』、明治8年『寄笑新聞』、明治10年増山守正『西京繁昌記』の挿画である。いずれにも詞書きや説明が付されているが、とりあえずは図像資料を見、「覗きからくり」と「西洋眼鏡」の概観の相違をみてみたい。

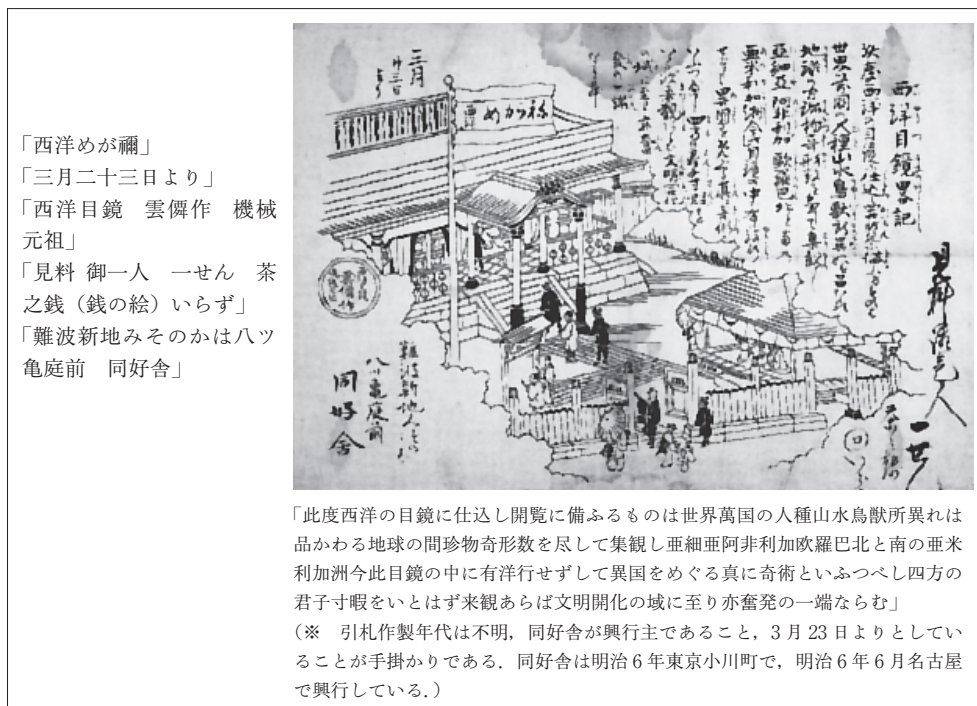


図3 「西洋目鏡略記」大阪城天守閣蔵『大坂の引札・絵びら』（1992年 東方出版 p 27）より転載。）



図4 「西洋目鏡略記」『覗きからくり』p 65より転載.]
(※木下直之『美術という見せ物』[1993年 平凡社] p 107にも同じ図がある。出典不明.)

a 明治6年 同好舎引札2枚

図3と図4は同好舎引札である。「西洋目鏡略記」と題されている。図3は，大阪難波新地で興行したときのもの，図4は東京小川町神保小路で興行したときのものである。

図3は「西洋目鏡」の鳥瞰図になっている。門が有り，受付が有り，大きな建物の中に入っていく。「西洋目鏡」では，建物の中で絵を見るもののようである。それに対し，図4の引札はレンズを覗いている絵が描かれている。顔よりもやや小さなレンズを覗き込んでいる。複数のレンズが，箱というよりも壁面に取り付けられている。ここから何かを覗いて見るのだろう。

両者の詞書きの内容はほぼ同じである。何を見ることができのかを広告している。主題は「世界万国の有様」であり，世界の人種，アジア，アフリカ，ヨーロッパ，アメリカの珍しい風景などを見せるという。図3詞書きには「寸暇をいとはず来観あらば文明開化の域に至り亦奮発の一端ならむ」とあり，文明開化の風潮によって，世界の風景を見せたと思われる。

図3，図4を見る限りにおいて，「西洋目鏡」は資料館や博物館のように建物の中で見るもので，覗きからくりよりも大がかりな覗き見る装置だったといえる。

b 明治6年『^{うきよきからくりせいやうめがね}浮世機関西洋鑑』にある「西洋眼鏡」

図5は，明治6年の岡丈紀 著述『^{うきよきからくりせいやうめがね}浮世機関西洋鑑』(1873年)にある口絵である。図5-1の絵には門柱に「西洋目鏡」の看板，と「萬笈閣」の銘があり，店屋の名前と商売の内容を示している。その門の前には着物姿の2人の女性，そして道路を歩く2人の男性が描かれている。そのうちの，1人は洋服，シルクハット，靴，ステッキといった西洋風の姿をし，もう1人は袴，ザンギリ頭，下駄履きといった出で立ちである。画面の左の方には門を覗く書生が描かれ，その上に招き看板が掛けられている。招き看板には西洋の女性が描かれている。

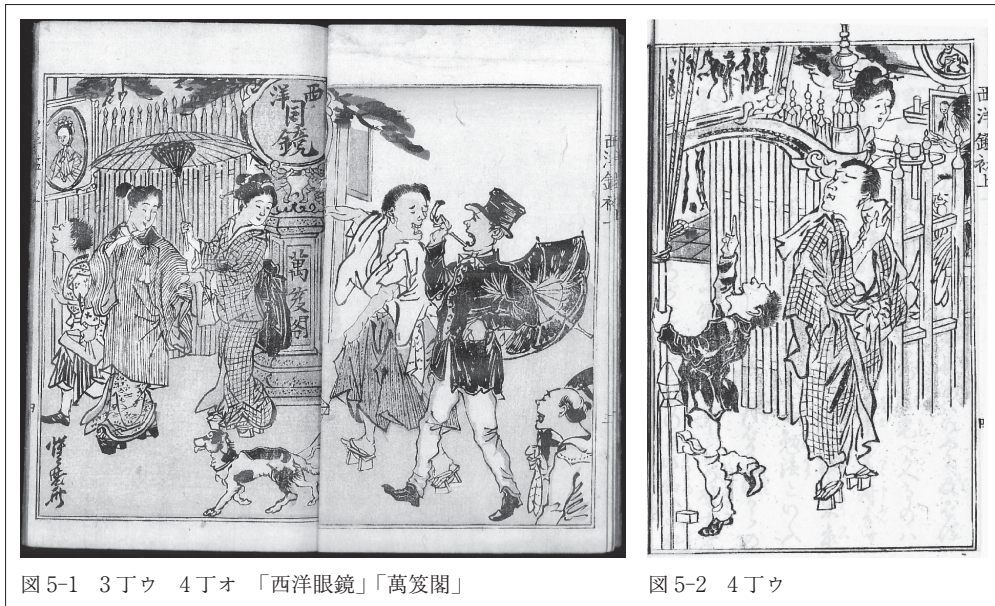


図5-1 3丁ウ 4丁オ 「西洋眼鏡」萬笈閣

図5-2 4丁ウ

図5 明治6年『浮世機関西洋鑑』猩々暁斎画（国会図書館蔵）

図5-2には、門から見える中の様子を描いている。また、門上の招き看板には洋装の男達と馬が描かれている。そして、柵で囲まれた門の中は茶屋の如くに席が設えられ、女性が御茶または酒と思われるものを差し出している。覗く場面は描かれていない。

場所や建物名は異なるが、門をくぐり、建物の中で見るものだったという点で、この2枚の絵は、先の図3と良く符合する。先の2枚の引札と比べて特徴的なことは、湯茶か酒を出す休憩所のような施設があったこと、明治6年当時の欧化政策を特徴的に示すシルクハット、ザンギリ頭、洋装などが描かれていることである。

c 明治8年『寄笑新聞』「のぞき眼鏡欧行論」

図6は、明治8年の『寄笑新聞』「のぞき眼鏡欧行論」にある挿絵である。壁面には4つのレンズ



図6 明治8年 寄笑新聞第七号 應需芳年画

付き覗き穴があり、それぞれイギリスの全景、フランスの都、イタリアの港、オーストリアの博覧会と張紙がある。それらの風景を見せたものだろう。その壁面の高さからかなり大がかりな装置のようだ。「覗きめがね」の前には、年寄りと若い粋な格好の書生が描かれ、今風と古風、開化の議論をしているという。

d 明治10年 増山守正『西京繁昌記』初編上「西洋眼鏡」

図7は増山守正による『明治新撰 西京繁昌記』初編上（明治10年3月刊）⁽⁶⁾にある「西洋眼鏡」の図である。本文中の「西洋装置の眼鏡肆頭」には、「セイヤウコシラへのメガネミセサキ」とルビが振られている。西洋から来た装置を真似た店という意味であろう。挿絵には、壁面に取り付けられたレンズ付きの覗き窓から中の絵を見る2人の男性が描かれている。レンズはそう小さくはなく、両眼で覗ける位のサイズである。



図7 明治10年『明治新撰 西京繁昌記』初編上「西洋眼鏡」十九ウ

挿絵の詞書きに「名区勝地百観場装置従無尽蔵真形映シ出シテ画に非ルカト疑フ人」とあるように、レンズを覗けば、名勝の景色がまったく本物のようで、人々が絵ではないと驚くほどの迫力だったということがわかる。見せる景色は外国の景色ではなく、東京両国橋と京都の景色だった。描かれる書生は学帽を被り、蝙蝠傘を持っている。蝙蝠傘は明治初期のハイカラを示す1つの道具である。

(3) 「西洋眼鏡」の様相

図1～図7から「西洋眼鏡」は、大道で商う仮小屋による見世物というよりも、常店のようにある。門塀を持ち、入場玄関を持つ小屋建てになっていたことがわかる。「西洋眼鏡」そのものには、

壁面に幾つかのレンズ付き覗き穴がある。レンズ径はかなり大きく両眼で覗ける大きさになっている。覗き窓毎に地名を書いた紙が貼られていることから、箱の中には各地の風景画があり、見る人が順次移動をしながら覗いていく装置だということがわかる。図4、図6、図7ともに装置の全容が描かれていないため、全体の大きさを把握することはできないが、絵の枚数分だけ横に長くなっていくと考えられる。

「西洋眼鏡」を箱の中の絵を繰り替えてみせる「覗きからくり」と比較してみると、レンズを覗くということでは一致するものの、かなり趣を異にする。「覗きからくり」と比べれば、「西洋眼鏡」の特徴は、両眼で覗く大きさの覗き窓が並び、1枚の風景画を1つの窓で見、人が移動しながら順次見ていくことにあるといえるだろう。見せるものは国内外の風景画で、文芸ものを見せていたのかは定かではない。移動興行用の組み立て小屋ではなく、常店であり、また茶店を併設していた可能性がある。

それでは、引札や挿画資料から「西洋眼鏡」の概略がわかったところで、各種資料に記述されているテキストを用いてその詳細を検討していくことにしたい。

2 服部誠一が書いた「西洋目鏡」

(1) 服部誠一『東京新繁昌記』初編 明治7(1874)年

まず始めに、前述した加藤秀俊が『見世物からテレビへ』[1965年]で引用した服部誠一『東京新繁盛記』⁽⁷⁾の「西洋目鏡」箇所を確認しよう。

服部誠一『東京新繁盛記』初編の刊行年は明治7(1874)年、明治初期の東京の様子が書かれている。「学校」、……、「写真」、「牛肉店」等の36項目の1つに「西洋目鏡」がある。服部は、「西洋目鏡」というものをよく観察し記述している。その記述は「西洋目鏡」の特徴を掴むのに有効であり、「覗きからくり」とは類似するが同じではないことがわかる。やや長くはなるが、西洋眼鏡のイメージを正確に把握するために当該箇所を示す。なお、下線は筆者による。

……是れ目鏡の繁昌に入て、写真と共に紅帘を飄へす所以なり。始め場を浅草の奥山に開く者有り、後数月ならずして、数処に及ぶ、殊に旧藩邸（藩邸新街と為る）に多し。……未だ真の市人にしてこの観を売る者を見ず、観室は概ね小塗屋を築き、前面纔に白壁を塗つて、その尻を拭はざるは、恰も竈婦の白粉を面に施こし、垢を背に存するに似たり。或は層楼を設くる者有り、板を染めて石に擬し、庸医の玄関に異ならず、室内数尺を隔て、数個の鏡を列ね、廻つてこれを観る、又た拳螺堂に入て龍王の宮殿を望むに異ならず。鏡面約ね、大蛇の眼の如く、一眼能く人の両眼に容る。観者即ち針穴より世界を覗て、値は僅かに一銭なり。其の画は、即世界万国の風景で、真に実景を写す者有り、或は全く想像を写す者有り、皆な写真店に従て、その糟粕を鬻ぐ者なり。倫敦の鉄橋は寛より長く、巴黎（仏京なり）の宮殿は雲より高し、露西亜の大將、怒つて兵卒の鬚を抜き、伊太利の婦人、臥て洋犬の口を吸ふ。米利堅の火事を買ひ来て之を売り、日耳曼戦争を包み去て之を開く。軍艦波を衝ひて、山山を為し、商船港とに入て、林又た林は蒸気車山に上り、輕気球空に飛ぶ。座して奇望峰を望む可く、臥して地中海を臨む可し。人を

喰ふ獅子は則ち必ず胴より屠り、舟を盪す黒人は、則ち永く底に黏す。博物館の図を観て、隣の典舗を侮どり、大病院の景を覗つて人の頭痛を憂ふ。観者最後の鏡に至て、益々その値の廉なるを知る可きなり。弁才天裸體にして床に臥し、肌膚皆の白くして、只だ臍下の小黑点を見るのみ。恨むらくは一脚を撐げて、その奥に媚びざるを。或は半身を露はして、その尻を見ざるを惜み、或は真面に対し、その唇を嘗めざるを歎ず。奇中の奇、新中の新、以て田夫野僮の眼を驚かすに足る。これその二三を挙ぐるなり。此の物の亦た観せ物なりと雖ども、之を他の観せ物に比すれば、則ち人に益有る少からず、浅草寺の贗虎は、斑猫の毛を染め、〈…中略…〉日ならずして贗偽の皮毛頒つ可きなり。此の画は則ち世界の新奇を写し、万国の風俗を模し、一目世界を巡るが如く人の眼目を喜ばしめて人の智識を弘めしむべきなり。其の国に至らざれば則ち未だその真偽を知る可からずと雖も、決して猫の虎と化す類に非ず。又た演史家の吐く虚言を見るが如き類に非らず。只だ曝店の古道具に過ぎざるのみ。

鏡室の外は小茶店を開き、娘誰も火盆を出し、娘何に煎花を観む。並びに妖粧盛飾、狐媚を売り猫諛を鬻ぐ。観者此に於て、始めて弁才天の真體を拝するなり。一笑客を顧みて二銭の茶料を促がし、二笑喫余の烟を与ひて、劇場の同行を説く。三笑他の膝に傍ふて、弁才の開帳を勧む。〈以下略…〉。〔服部誠一「西洋眼鏡」『東京新繁昌記』初編 1874年⁽⁸⁾、34丁ウ～36丁オ〕

服部によれば、西洋眼鏡は始め浅草奥山に開かれ、その後数ヶ月で数ヶ所に増えたという。また旧藩邸の新街に多かったとも述べている。

観室は概ね小屋を建て、僅かに前面だけが白塋塗になっているものや、やぶ医者（庸医）の玄関の如く板を染めて石に擬していたものがあつた。また、層楼を設けているもの、拳螺堂のごとく内部が螺旋状になっていうものがあつたという。建物内部には数尺おきに数個の鏡、すなわちレンズがあり、それを廻って見るようになっていた。拳螺堂のような構造になっているものの覗き窓は大蛇の眼のようで、人の両眼で観るほどの大きさだったとする。その見世物の見料は一銭である。

見せる万国の風景は「真に实景を写す者有り、或は全く想像を写す者有り」という画で、ロンドンの鉄橋、パリの宮殿、ロシアの大將、イタリアの婦人、アメリカの火車、日耳曼戦争等の風景だという。また、博物館や大病院の図もあり、それらを見て最後に「奇中の奇、新中の新」という眼が驚かされるものがあり、それは色の白い弁才が裸でベッドの上に寝ている写真だった。

服部はこの「西洋目鏡」の見世物を、他の見世物に比べて益があり、真偽の程は知らないが浅草に出る毛を染めた猫の見世物よりはマシだという。また、世界の新奇なものや万国の風俗を知ることができ、人々の知識を広めてくれるものだと評価している。

以上の記述に続き、「鏡室の外は小茶店を開き、娘誰も火盆を出し、娘何に煎花を観む。」云々という文を服部は書く。レンズを覗く部屋の外に小さな茶店があり、娘がたばこ盆を出し、客を誘うがこちらも所詮贗弁才だというのである。この資料を単独で読むとよくわからないものがあるが、明治6年『浮世機関西洋鑑』の図〔図5〕と合わせて見たときに、服部が書いたこの様子を理解できる。この「西洋眼鏡」は、覗く部屋の外部に茶店があり若い娘が給仕をしていた様子を書いているのである。

つまり、服部の書く「西洋目鏡」とは、前面のみを飾った小屋で、建物の中に等間隔でレンズを配して、次々と覗き穴から覗かせては外国の写真や絵を見せる見世物装置であり、加えて、お茶を飲ま

せる店があり、若い娘が給仕をするものということになる。それが、浅草の奥山から起こり、あっという間に広まったという説明になる。

また、服部がいうところの「観室は概ね小塗屋を築き、前面纔に白堊を塗つて、……或は層楼を設くるものあり、板を染めて石に擬し、庸医の玄関に異ならず、室内数尺を隔て、数個の鏡を列ね、廻つて之を観る、……。鏡面約ね、大蛇の眼の如く、一眼能く人の両眼に容る。」とする外観をイメージするのはかなり難しい。しかし、図3、図4の同好舎の引札を併せて考えれば、このように建物を選んだのだと理解ができる。

小屋の外観装飾もさることながら、人々をレンズ穴から穴へと歩き回らせて外国の風景や美しい婦人達を描いた絵を見せるという趣向、また、喫茶店のごとくに湯茶を供す設えとなっていたことに特徴を見出す。そうなれば、持ち運んで寺社の境内などで露天小屋掛け興行をする「覗きからくり」とはだいぶ違う様相である。

ところで、服部はこの「西洋目鏡」記事とは別に「万世橋」の項で「機榎^{カラクリ}」を紹介する。つまり、同じ時代に「西洋目鏡」と「機榎（からくり）」が存在したことになる。以下、その記述である。

繡屏彩障以て小露肆を開き、阿七吉三等の絵額を匾す。髟前に数小鏡を列ね、一観の値へ半銭に逾せず、一男一婦、手巾頭を罩め其の両隅に立て、その写す所の事蹟を説く。語るに非ず歌ふに非ず、別に一曲節を爲す。男唱ひ婦和し、聲に応じて糸を牽く、花園覆ふて月殿と為り、宴席転じて閨房と化す。一唱一変、聴て飽かず、観て倦まず、子童蟻集、稚女蠅屯、爲に煨薯炒豆の半費を減ず、之を名けてと機榎^{カラクリ}と謂ふ。或は各国の大戦を写す者有り、或は古今の人物を模する者有り、或は復讐者、或は情死人。〈以下略…〉。〔服部誠一「万世橋 附 住吉踊、弄珠師、街頭演史、機榎」『東京新繁盛記』第三編 1874年、32丁オ、ウ〕

それは小さな露店でカラクリと呼ぶ。お七吉三などの絵を飾り両脇に男女が立ってその絵について語るものだという。男女は掛け合いで節をつけた語りをするが、糸を引く度に絵が変わり、花園が月殿となり、宴席が閨房と化すもので、見て飽きず、子供も見に来る。見せるものは、各国の大戦、古今の人物、復讐するものや情死人だったと説明をしている。

すなわち、江戸時代から覗きからくりと呼ばれたレンズを覗かせ、糸をひいて箱の中の絵を繰り替える形式の装置は、「西洋眼鏡」と変容してしまっただけではなく、「覗きからくり」は覗きからくりとしてそのまま興行をしていたということがいえるだろう。「西洋眼鏡」が新たな見世物として衆目に供せられた一方で、覗きからくりもそのまま存在していたということである。

3 「西洋眼鏡」資料一覧

それでは、「西洋眼鏡」とその類似する見世物はいつ登場し、いつ廃れていったのか。まずは、「西洋眼鏡」が存在した時期について確認したい。比較的年月日のはっきりしている資料を表1にまとめた。なお、類似する見世物とは、「西洋眼鏡」の呼称は用いていないものの、それまでの覗きからくりとは異なっていて、「西洋眼鏡」と同じようなものを見せると判断されるものである。

表1 「西洋眼鏡」資料一覧

| 年 | 和暦 | 日時・場所・内容 | 出典 |
|--------|--------|--|---|
| 1871 年 | 明治 4 年 | 日時：秋（9 月発売） 場所：東京浅草奥山 「先キノ比ヨリ外国勝景ノ地亦其人物状態等ヲ写照スル眼鏡ヲ諸人ニ示ス」 | 『影響新聞』第 1 号（『日本初期新聞全集』32, 345 頁） |
| 1872 年 | 明治 5 年 | 日時：旧暦 3 月 10 日より 50 日間 場所：京都（第 1 回京都博覧会） 「西洋絵覗きからくりは、従来、……明治五年西京博覧会杉浦三郎兵衛の出品に『舶来覗眼鏡』とあり、双眼写真にや。」 | 石井研堂『明治事物起源』下巻, 1234 頁. |
| | 明治 5 年 | 日時：夏の頃より（9 月 28 日条） 場所：江戸各地 「所々に西洋画の覗きからくりを造り設け、見物を招く。」 | 齊藤月岑『増訂武江年表』2, 251～252 頁. |
| 1873 年 | 明治 6 年 | 日時：明治 6 年 場所：東京小川町神保小路出張 「西洋目鏡 雲儼作 機械祖」 | 同好舎「西洋目鏡略記」, 山本慶一『覗きからくり』二一図引札, 65 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：新暦正月小正月頃 場所：大坂難波新地 「西洋大目鏡見世 札銭百廿四文」 | 『近來年代記』下, 明治 6 年, 159 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：3 月 15 日より 50 日間 場所：大坂四天王寺北門外にて 「大象生人形」, 「馬乗り芸」, 「さる芝居」, 「足力持」, 「西洋大目かね」など | 『近來年代記』下, 明治 6 年, 160 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：3 月 23 日より（※注 年表示なし） 場所：大坂難波新地みそのかはハツ亀庭前にて, 同好舎による興行. 「西洋目鏡 雲儼作 機械元祖」 | 同好舎「西洋目鏡略記」〔大阪城天守閣蔵『大阪の引札・絵びら』図 33, 27 頁〕 |
| | 明治 6 年 | 日時：5 月 場所：（東京）連雀町新町家 （元諸侯の邸の）大なる望火楼ありしを工夫して、頂上より下座敷迄油絵の覗きからくりを仕掛けて見物を招きたり. | 齊藤月岑『増訂武江年表』2, 257 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：5 月 15 日より 60 日間 場所：東京東両国回向院 開帳中. 境内に撃剣会, 西洋のぞきからくり, ……其の外見せ物多く出る. | 齊藤月岑『増訂武江年表』2, 256 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：5 月中旬開店 場所：名古屋本町通惣見寺門前町にて 「西洋眼鏡定店／此度西洋ノ眼鏡ニ仕込ミ高覧ニ備フルハ……」 | 『愛知週報』第 16 号（5 月 11 日付記事） （『日本初期新聞全集』51, 311 頁）. |
| | 明治 6 年 | 日時：6 月 9 日～11 月 7 日 場所：名古屋市内各处 「木村定恭・小林精一」による「西洋目鏡」興行. | 『近代歌舞伎年表・名古屋篇』, 84 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：7 月初旬（7 月 6 日付記事） 場所：名古屋小四区菅原町にて 「名古屋市中西洋眼鏡大ニ流行シ、處々ニ開店セルガ、小四区菅原町ノ眼鏡中に耶蘇宗ノ極楽トカノ図アリテ、人衆諸楽ヲナセル上ニ羽人空中ニ逍遙スル体ヲ写セリ。」 | 『愛知週報』第 24 号 （『日本初期新聞全集』54, 318 頁） |
| | 明治 6 年 | 日時：8 月中頃 場所：名古屋巾下新道林貞院門前にて西洋目鏡. | 『近代歌舞伎年表・名古屋篇』, 84 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：不明 場所：東京 「西洋目鏡」, 「萬笈閣」 | 岡丈紀編『浮世機関西洋鑑』（明治 6 年 10 月）にある「西洋目鏡」口絵. |
| | 明治 6 年 | 日時：10 月 場所：名古屋信行院の開帳の時 西洋目鏡. 境内に一ヶ所, 門前に三ヶ所出た. | 『近代歌舞伎年表・名古屋篇』, 96 頁. |
| | 明治 6 年 | 日時：10 月（10 月 7 日付記事） 場所：東京下谷御成街道元鳥居邸跡にて 「下谷御成街道元鳥居邸跡に西洋各国の景状等を模画せし眼鏡縦覧所あり。」 | 『郵便報知新聞』159 号 （『日本初期新聞全集』60, 225 頁） |
| | 明治 6 年 | 日時：11 月 7 日より 場所：名古屋大須入口にて西洋目鏡. | 『近代歌舞伎年表・名古屋篇』, 84 頁. |

| | | | |
|--------|---------|--|--|
| 1874 年 | 明治 7 年 | 日時：不明 場所：京都 「閣中数十の玻璃鏡を設け、名付けて唐人鏡と曰ふ」 | 菊池三溪「写真鏡舗」『西京伝新記』、278 頁. |
| | 明治 7 年 | 日時：4 月 21 日～7 月盆頃 場所：東京浅草奥山 西洋画工五姓田芳柳・義松による油画興行. 太夫元新門辰五郎. | 平木政次『明治初期洋画壇回顧』、23 頁 「油画興行の番付」引札. |
| | 明治 7 年 | 日時：5 月 場所：名古屋西本願寺掛所 「名古屋西本願寺掛所にて、西洋目鏡. 興行人子林精一」 | 『近代歌舞伎年表・名古屋篇』、127 頁. |
| | 明治 7 年 | 日時：7 月初旬より 場所：東京両国回向院 釈迦無尼仏開帳. 境内に様々な見世物が出る. 陶器細工, 貝細工, 人形, 曲馬, 人形目鏡, 熊芸, ……., 油絵眼鏡, 押絵眼鏡, ……., 花鳥など. | 『日新真事誌』7 月 25 日, (『郵便報知新聞』8 月 13 日, 『東京日日新聞』7 月 23 日). |
| | 明治 7 年 | 日時：8 月 場所：東京銀座八丁煉化家屋 「細事と雖も一時の利を占るものは、煉化家屋の昼夜目鏡なるべし、当主百円内外の資本を以て世人の已に厭きて目も振らぬ西洋目鏡に、一種工夫のカラクリを仕掛け、暗にも明き開化の見世物、夜を日に継ての繁昌実に昨今の当りなるべし」 | 『新聞雑誌』明治 7 年 8 月 24 日 |
| | 明治 7 年 | 日時：8 月 場所：東京深川靈巖寺境内 五姓田芳柳・義松による油画興行. | 平木政次『明治初期洋画壇回顧』、24 頁. |
| 1875 年 | 明治 8 年 | 日時：不明 場所：不明 「世界万国の風景にして、真に実景を写すものあり、或は全く想像を写すものあり」 | 服部誠一「西洋目鏡」 『東京新繁昌記』初編に記述が有るが、年月日不明. |
| | 明治 8 年 | 日時：不明 場所：不明 是は此度の新発明西洋視眼鏡の根元欧羅巴洲は英吉利、仏蘭西、露西亞、普魯士、 ^{オーストリア} 奥地利、の五強國より伊太利、和蘭、の首府港々の景色を残る限なく巡覧ありて價へ二銭のお慰み代はお戻りにて宜し. | 橋爪錦造『寄笑新聞』第 7 号「のぞき眼鏡欧行論」(明治 8 年)、一丁オ. |
| | 明治 8 年 | 日時：5 月 6 日 場所：東京鍛冶町二丁目西側 「……雲礫機械の目鏡開業の処今に至り日々来觀の君子絶間なく実にかたじけなき仕合也亦此度……」 | 『読売新聞』5 月 7 日 |
| 1876 年 | 明治 9 年 | | |
| 1877 年 | 明治 10 年 | 日時：不明 場所：東京浅草 「此ノ如キ世界ノ風俗新奇ヲ斜孔ノ間ヨリ觀ルモノハ何ゾ当今流行ノ西洋眼鏡是ナリ. ……」 | 川井景一『浅草新誌初編』明治 10 (1877) 年、九丁ウ. |
| | 明治 10 年 | 日時：不明 場所：花岡町掛渡したる高小屋 「……真砂の貝細工艸木作りの生人形は万国目鏡の色々に自然と働く電信器その糸筋の針金細工……」 | 『かなよみ』第 357 号 5 月 7 日 |
| 1878 年 | 明治 11 年 | 日時：10 月 10 日頃より 場所：東京芝土橋より比丘尼橋までの間 「過日許可になりし芝土橋より比丘尼橋迄の間、觀せ物興行場の内、八官町川岸通へは昨日頃より西洋手品、同く眼鏡、或は洋犬の手踊り杯、様々な興行場を取り建しと」 | 『郵便報知』10 月 11 日 |
| | 明治 11 年 | 日時：11 月頃 場所：東京八官町土橋北の河岸なる二等煉瓦室 「久しく住む人の無かりし八官町土橋北の河岸なる二等煉瓦室にては此程よりいよいよ猿芝居、人形遣ひ写真目鏡などの興行を始めた」 | 『朝野新聞』11 月 5 日 |
| 1879 年 | 明治 12 年 | | |
| 1880 年 | 明治 13 年 | | |
| 1881 年 | 明治 14 年 | 日時：1 月 1 日より 場所：大坂道頓堀戎座にて 「当時、道頓堀戎座にて興行して居る西洋大眼鏡の太夫ジョネス氏は去一日より十四日迄の上り高を悉皆南区役所へ贈られしは全く旧冬類焼に罹りたる島の内貧民への救助金なりと」 | 『朝日新聞』1 月 16 日 |

| | | | |
|-----------------------|-------------------------|--|--|
| 1881 年 | 明治 14 年 | 日時：6 月 場所：浅草 「浅草眼鏡に元祖大眼鏡あり、大見八景有り、其の状俱にからくりにて非なり、八景は寫真を、油絵に複写して、全く眞に迫る。」 | 明治 14 年 6 月『東新』第 250 号（石井研堂『明治事物起源』下巻 p1236 に掲載） |
| 1882 年 | 明治 15 年 | 日時：1 月 1 日より 場所：東京浅草公園地 「○浅草奥山の元祖大眼鏡と言てはお子供衆まで能く御存じにて写真絵油絵を大きく見せたは東京では爰が初めてといひ……油画一式にて山川、草木、花鳥、人物生るが如きもの五十余枚を掲げて……。」 | 『有喜世新聞』明治 14 年 12 月 27 日「元祖大めがね場」広告有り。 |
| | | 「浅草奥山の元祖大眼鏡は時節がら日々看客も多くあるので、コルム石版絵などのありしを引替各国名所の油絵多く新に加へたるよしなれば一層見栄がありませう」 | 『東京絵入新聞』4 月 1 日 |
| 1883 年 | 明治 16 年 | 日時：1 月 1 日より 場所：東京浅草公園地花屋敷 「……元祖大眼鏡は、外国と日本の名所を描きたる油画、コルム画を数多さしかへ、傍の粧飾をも修繕して」 | 『東京絵入新聞』明治 15 年 12 月 28 日 |
| | 明治 16 年 | 日時：4 月 1 日より 場所：東京浅草奥山 「元祖大目鏡場に於て吉原にて美人の名を得たる仲ノ町引手茶屋伊勢屋のおマメを始め、有名の娼妓の肖像を新規油絵に描かせ、明一日より遊客に覗かせるとのこと」 | 『朝野新聞』3 月 31 日 |
| | | 日時：10 月 21 日 場所：東京浅草公園地奥山 「浅草公園地奥山の大目鏡は看客多く繁昌に付、お礼の為めなりとて、俳優似顔の種々の造り菊をお負けに見せるとのことなれば、城中の士女陸続詰め掛くるなるべし」 | 『朝野新聞』10 月 21 日 |
| 1884 年 | 明治 17 年 | 日時：4 月頃 場所：東京浅草花屋敷 「此図を外さじと浅草花屋敷の元祖大眼鏡にては花木にて種々の生人形を作り大眼鏡の余興に見物させる……。」 | 『読売新聞』4 月 5 日 |
| 1885 年 | 明治 18 年 | 日時：1 月 1 日より 場所：東京浅草公園地第二号に移転して 「是まで浅草奥山にありし元祖大眼鏡は今度同公園第六区即ち新地第二号へ引移り西洋各国其他の新図を取寄せ来一月一日より眼鏡茶屋を開業し一人前二銭にて各図を見物させ煎茶を供すといふ」 | 『郵便報知新聞』明治 17 年 12 月 28 日 |
| | 明治 18 年 | 日時：4 月 5 日（質入事件記事） 場所：大坂長町 「西洋眼鏡を見やうアレには外国の都府の図や戦争の図や……何かに益のある事があるから……」 | 『朝日新聞』4 月 9 日 |
| | 明治 18 年 | 日時：10 月 15 日以後 場所：東京浅草新公園地 「浅草新公園地の元祖大目鏡にては在来の油絵の外に今度更に大坂洪水の写真大板十五枚を増し、夫で見料は僅か一銭」 | 『読売新聞』10 月 15 日 |
| 1886 年 | 明治 19 年 | 日時：5 月 16 日より 場所：東京浅草公園地 「○大眼鏡の開場 浅草公園地第六号にある元祖大眼鏡にては是迄の品は残らず取替皆新規の油えとさし二十八ヶ所の目鏡を見せお茶代ぐるみ二銭より外は一切申請ず明十六日より開場するとの事」 | 『東京絵入新聞』5 月 15 日 |
| 1887 年 ～ 1891 年 | 明治 20 年 ～ 明治 24 年 | | |
| 1892 年 | 明治 25 年 | 日時：不明 場所：不明 「○大目鏡の流行 四五年来流行の目鏡は楕円形にて最も小なるものなりしが昨今は朝鮮形とて円形の大なるものが流行するに至りし由。」 | 『読売新聞』4 月 28 日 |

(1) 「西洋眼鏡」のさまざまな呼称

表 1 から、「西洋眼鏡」とそれに類するものは、明治 4（1871）年秋頃から明治 25（1892）年にか

けて資料上に現れ、中でも集中的に現れるのは明治19(1886)年までだといことがわかる。すなわち、ほぼその期間に存在したと考えられる。その「西洋眼鏡」およびそれに類する見世物の呼称であるが、呼称と資料数を表2に整理してみた。その呼称は、「外国勝景ノ地亦人物状態等ヲ写照スル眼鏡」^{ケイヨキ トコロ アリサマ セウウツシ}、「舶来視眼鏡」^{めがね}、「西洋画(絵)の覗きからくり」^{めがね}、「西洋大目鏡」^{めがね}、「西洋目鏡」^{めがね}、「油絵の覗きからくり」^{めがね}、「西洋のぞきからくり」^{めがね}、「油画(絵)興行」^{めがね}、「西洋各国の景状等を模画せし眼鏡縦覧」^{めがね}、「唐人鏡」^{めがね}、「油絵眼鏡」^{めがね}、「西洋視眼鏡」^{めがね}、「目鏡」^{めがね}、「万国目鏡」^{めがね}、「写真目鏡」^{めがね}、「(浅草…の)元祖大眼鏡」^{めがね}、「大目鏡」など、17種類に及ぶ。その中でも、一番多いのが「西洋目鏡」14件である。「西洋大目鏡」(3件)と合わせると17件となる。「目鏡」とはすなわち「覗きからくり」と解すれば、「西洋のぞきからくり」^{めがね}、「西洋視目鏡」^{めがね}を加えて、「西洋」を冠するものは19件となる。

他には、「西洋画(絵)ののぞきからくり」^{めがね}、「油絵の覗きからくり」^{めがね}「油絵眼鏡」^{めがね}と油画を見せた覗きからくり(眼鏡)とするものが3件、「油画(絵)興行」^{めがね}とするものが2件、合わせて6件ある。つまり、油画を覗かせる見世物だったことがわかる。これらは「西洋眼鏡」の呼称と並行的に存在する。また「元祖大眼鏡」^{めがね}が「浅草…」と地域を限定して明治14年以降に登場する。

表2から、外国の景色を見せる装置が西洋から入って来て、当初はそれを模した見世物に「外国勝景ノ地亦人物状態等ヲ写照スル眼鏡」^{ケイヨキ トコロ アリサマ セウウツシ}、「舶来視眼鏡」^{めがね}、「西洋画の覗きからくり」^{めがね}と見せる物を説明するが如くの呼称を付していたが、次第に「西洋眼鏡」ないしは「西洋大眼鏡」の呼称が固定化されていったことがわかる。また、西洋渡来の装置ないしは西洋の風景を見せるとして宣伝したこと、また、油画で描いた絵をレンズで覗かせた見世物だったことがわかる。

(2) 「西洋眼鏡」の始まりと終わり

「西洋(大)眼鏡」^{めがね}、「元祖大眼鏡」^{めがね}の呼称の現れる時期を表3にした。ただし「眼鏡」も「目鏡」^{めがね}も「眼鏡」として表記してある。「西洋眼鏡」に類似する見世物が初めて興行されたのは明治4年である。「西洋眼鏡」は明治6年に初めて興行が行われ、呼称が定着したと思われる。「西洋(大)眼鏡」の呼称は、明治14年までであり、「元祖大眼鏡」^{めがね}、「大眼鏡」の呼称は明治14年6月から明治25年4月頃までである。

表2 さまざまな呼称

| 呼 称 | 資料提示時期 | 資料数 |
|--|--------------------------------|-----|
| 外国勝景ノ地亦人物状態等ヲ写照スル眼鏡 ^{ケイヨキ トコロ アリサマ セウウツシ} | 明治4年秋頃 | 1 |
| 舶来視眼鏡 ^{めがね} | 明治5年3月10日より | 1 |
| 西洋画(絵)の覗きからくり ^{めがね} | 明治5年夏頃より | 2 |
| 西洋大目鏡 ^{めがね} | 明治6年1月 ↓ 明治14年1月1日より | 3 |
| 西洋目鏡 ^{めがね} | 明治6年3月23日 ↓ 明治7年8月頃 | 12 |
| 油絵の覗きからくり ^{めがね} | 明治6年5月頃 | 1 |
| 西洋のぞきからくり ^{めがね} | 明治6年5月15日より | 1 |
| 油画(絵)興行 ^{めがね} | 明治7年4月21日 ↓ 明治7年8月頃 | 2 |
| 西洋各国の景状等を模画せし眼鏡縦覧 ^{めがね} | 明治6年10月頃 | 1 |
| 唐人鏡 ^{めがね} | 明治7年 | 1 |
| 油絵眼鏡 ^{めがね} | 明治7年7月初旬より | 1 |
| 西洋視眼鏡 ^{めがね} | 明治8年 | 1 |
| 目鏡 ^{めがね} | 明治8年 | 1 |
| 万国目鏡 ^{めがね} | 明治10年5月末日以前 | 1 |
| 写真目鏡 ^{めがね} | 明治11年11月頃 | 1 |
| (浅草…の)元祖大眼鏡 ^{めがね} | 明治14年6月 ↓ 明治19年5月16日より興行 | 9 |
| 大目鏡 ^{めがね} | 明治16年10月21日 ↓ 明治25年4月28日 | 2 |

明治14(1881)年以降に浅草でのみ「元祖大眼鏡」が興行されていたことから、浅草で限定的に興行され継続されたもので、他地域では明治14年頃に衰退に向かったのではないかということが推測

表3 「西洋眼鏡」呼称の始まりと終わり

| 呼 称 | | 時 期 | 場 所 |
|----------------|-----|---------|---------|
| 「西洋眼鏡」に類似するものの | 始め | 明治4年 | 東京浅草 |
| 「西洋(大)眼鏡」の呼称 | 始め | 明治6年1月 | 大坂難波新地 |
| この間資料記事数:21 | | | |
| 「西洋(大)眼鏡」の呼称 | 終わり | 明治18年4月 | 大坂道頓堀 |
| 「元祖大眼鏡」 | 始め | 明治14年6月 | 東京浅草公園地 |
| この間資料記事数:11 | | | |
| 「元祖大眼鏡」,「大眼鏡」 | 終わり | 明治25年4月 | |

できる。また、「西洋眼鏡」,「元祖大眼鏡」ともに、明治25(1892)年4月を最後に、興行を伝える資料が見えない。加えて明治19(1886)年から明治25年の間の資料がほとんど見られなくなる。このことから明治19年夏から明治25年にかけて「西洋眼鏡」は衰退し、「元祖大眼鏡」も明治25年以後数年の内に廃れていったのではないかと考える。

次項で紹介する斎藤月岑『増訂武江年表』明治5年9月28日条には、「所々に西洋画の覗きからくりを造り設け、見物を招く。夏の頃より浅草寺奥山花屋敷の脇に始まる。夫より続いて出来る」とあり、服部誠一『東京新繁昌記』巻一(明治7年)の西洋眼鏡は「始め場を浅草の奥山に開く者あり、後数月ならずして、数処に及ぶ」とあることから、明治5年以降あつという間にあちこちに建てられ増えたということになるのだが、「西洋眼鏡」の資料数増加はその記述と一致する。

(3) 「西洋眼鏡」の興行地

表1によれば興行地域は、東京、京都、大坂、名古屋の4ヶ所に分けられる⁽⁹⁾。また、絵ビラにあった同好舎は、明治6年東京小川町、たぶん同年と思われる3月23日大坂難波新地、明治6年6月9日より名古屋若宮と広域に移動して興行をしていることがわかる。転々と場所を変えるものも、服部誠一が述べていたように旧藩邸などを利用したものもあったということであろう。

つまり、広域に移動した興行主もいた一方で、その都市内でのみ限定的に商売をしていた興行主もいたことになる。東京、京都、大坂、名古屋の4ヶ所に分け、その様相を確認していく作業が必要である。しかしながら、本稿は「西洋眼鏡」とは何かを知ることが目的とするため、東京における商売の様相に限定して検討を進めることにする。

4 東京における「西洋眼鏡」

東京における「西洋眼鏡」は、浅草奥山を発祥の地とすることは資料間で一致する。しかし、始まりの時期には若干の異同がある。それは、回顧記録による記憶のあいまいさと、油画を覗かせる「西洋眼鏡」、クロム画を覗かせる興行、油画を見せる興行の3種があったためではないか。整理をしながら確認していくことにする。

(1) 浅草の楽眼窟と拳螺堂^{サザエドウ}

次の2つの記事は浅草奥山の「西洋眼鏡」の始まりに関する記述である。1つは、明治4年9月の影響新聞第一号記事であり、もう1つは明治10(1877)年の川井景一『浅草新誌初編』にある記事

である。ただし、前者の記述された時点で「西洋眼鏡」の呼称はまだ生じていず「眼鏡」とあるのみである。

a 明治4年9月 影響新聞第一号

「○浅草奥山ニト居スル小林誠造ナル人^{キシ}楽眼^{セイ}ニテ先キノ比ヨリ外国^{ケイヨキ}勝景^{トコロ}ノ地亦其人物^{アリサマ}状態等^{セウウツシ}ヲ写照スル眼鏡ヲ諸人ニ示ス、薬代見料トモ僅カニ孔方百錢ヲ以テ定価トス。又此頃^{フロイス}字漏生人^{モトメ}コー購求シタル所ノ九尺四方ノ油絵^{マイ}五張ヲ別ニ見スルノ設ケ有リ此油絵ハ全世界^{ヨノナカ}ニイマダ類ヒナキ奇物^{メツラシキモノ}ニシテ購主モ大ヒニ世ニ夸耀^{カヒヌシ}センノ意アリ。東京ニ遊歴^{ジマン}セン四方ノ旅客等ハ必ス彼所ヲ訪ヒテ一見アラバ帰郷^{カヘリテノチ}後ノ能キ談柄^{ハナシグサ}ナルベシ。」〔『日本初期新聞全集』32, p 345〕

b 川井景一 『浅草新誌初編』明治10(1877)年

一室ニシテ日本ヨリ支那ヲ踰ヘ、英国^{イギリス}ヲ経テ仏国^{フランス}ニ出テ魯西亜^{ロシア}ヲ回り、米利堅^{アメリカ}ヲ超シ、伊太利^{イタリア}ヲ過ゲテ日耳曼^{ゼルマン}ニ至ル、此ノ如キ世界ノ風俗新奇ヲ、斜孔^{ワツカナアナ}ノ間ヨリ覗ルモノハ何ゾ当今流行ノ西洋眼鏡是ナリ。乃チ西隅ニ在ルモノヲ^{ラクガントツ}楽眼窟ト言ヒ、ソノ東ニ在ル者ヲ^{サザエドウ}拳螺堂ト云フ。而シテ楽眼窟ハ、東都西洋眼鏡ノ元社ニシテ、始メテ業ヲ爰ニ開ク者ト云フ。嗚呼僅カー錢ニシテ世界万国ノ風景ヲ^{ナントヤスイモノ}覗ル、豈ニ廉ナラズヤ。〔九丁ウ〕(注：句読点及び下線は筆者による。)

逆順とはなるが先に、b 川井景一の『浅草新誌初編』(明治10(1877)年)を見てみたい。明治10年当時流行していた「西洋眼鏡」は、中国、イギリス、フランス、ロシア、アメリカ、イタリア⁽¹⁰⁾を経てゼルマンなどの世界万国の風景を覗かせたとする。興味深いことは、浅草の西隅に楽眼窟があり、東には拳螺堂^{サザエドウ}があったとしている点である。加えて、「楽眼窟は、東都西洋眼鏡の元祖」と述べている。

ここでa 明治4年9月の影響新聞第一号を見れば、浅草奥山に住む「小林誠造」という人物が「楽眼^{キシ}」で「外国^{ケイヨキ}勝景^{トコロ}ノ地亦人物^{アリサマ}状態等^{セウウツシ}ヲ写照スル眼鏡」を見せたという。また、フロイス人コーから買ったという2.7メートル四方の大きな油画を見せる見世物もあったという。

浅草奥山に住む「小林誠造」という人物が誰かということになるが、後述するように奥山で最初に「西洋眼鏡」を始めた人物が淡島椿岳であること、その淡島椿岳は本名小林で維新当時小林城三と名乗っていた⁽¹¹⁾ということから、淡島椿岳自身か、椿岳に縁続きの人物だということになる。また、「楽眼^{キシ}」とは、川井が「東都西洋眼鏡の元祖」とした「楽眼窟」のことだと思われる。

さて、服部誠一は先の「西洋眼鏡」で、層楼になっているものと拳螺堂のようにになっているものがあるとしていたが、川井景一の拳螺堂があったとする記述とつながる。すなわち3つの資料から、浅草西洋眼鏡は明治4年に始まり、世界万国の景色を覗き見るようになっていた。明治7年時点で西の楽眼窟と東の拳螺堂の2ヶ所があり、西側の楽眼窟は「西洋眼鏡の元祖」ということになる。

(2) 『武江年表』にある「西洋眼鏡」

齊藤月岑も「西洋眼鏡」とは書いていないが、⁽¹²⁾『武江年表』の明治5(1872)年9月28日条、明治6(1873)年5月、巻末の「附録」に、西洋画や油画を見せる覗きからくりについて書いている。名

称が不明なため内容をそのまま呼称にしたと思われる。齊藤月岑は明治5年に浅草で「西洋画の覗きからくり」が始まり、9年頃には段々と廃れたとする。内容は以下の通りである。

a 明治5(1872)年9月28日条

○所々に西洋画の覗きからくりを造り設け、見物を招く。夏の頃より浅草寺奥山花屋敷の脇に始まる。夫より続いて出来る。△神保町二丁目(池田氏、六月より)△同一丁目(十月始めより)△増上寺山内二ヶ所(九月より)△芝太神宮△田村小路(日本名所)△烏森稻荷社西道(日光山名所其の外)△芝日陰町△浅草寺淡島社後(九月より)△九段坂上(同)△湯島天神下(十月より)△御蔵前床店(十月より)△麴町平河天神内△下谷御成道西側(十月より)△四谷あらき横町△淡路町△車坂町其の外、翌西年中へ掛け追々に出来たり(明治九年の頃にいたりて追々に廃れたり)。〔齊藤月岑『増訂武江年表』2 平凡社 東洋文庫, p 251~252〕

この条から、西洋画の覗きからくりは、明治5年の夏に浅草寺奥山花屋敷の脇から始まったと認識していることがわかる。それが続々と、神保町二丁目、神保町一丁目、増上寺山内二ヶ所、芝太神宮、田村小路、烏森稻荷社西道、芝日陰町、浅草寺淡島社後、九段坂上、湯島天神下、御蔵前床店、麴町平河天神内、下谷御成道西側、四谷あらき横町、淡路町、車坂町の18ヶ所に出来、その他に翌西年に掛けても出来たという。そして明治9年の頃にいたっては段々に廃れたという。あっという間に作られ、あっという間に廃れたことになる。いかに一時に話題となり、観客が多かったかを示している。

また、「出来た」場所を示していることから、大道や寺社境内を移動する興行ではなく、一定期間開設或いは、移動をしない常店だったと考えられる。

明治5年の夏に始まったかどうかは、明治9年の記事が同じ条に記してあることから推測すれば、その始まりの時期が実際と多少異動していても不思議は無いと思われる。それでは他の条も見ていこう。

b 明治6(1873)年5月15日条

○同十五日より六十日の間、回向院に於いて、高野山弘法大師開帳(十二日着あり。其の日の群衆夥しかりし)、開帳中。境内に撃剣会、西洋のぞきからくり朝比奈三郎と、大黒天の巨像(各三丈余の座像なり)の活人偶化もの二カ所、其の外見せ物多く出る。〔齊藤月岑『増訂武江年表』2 平凡社 東洋文庫, p 256〕

c 明治6年5月条

○五月、筋違橋御門内広場、連雀町へ合併の新町屋……。此の連雀町新町家は元諸侯の邸故、大なる望火楼ありしを工夫して、頂上より下座敷迄油絵の覗きからくりを仕掛けて見物を招きたり。楼上より四方を眺望して少しく趣ありしが、やゝ廃れたる頃亥年の災に亡びたり。〔前同, p 257〕

d 卷末「附録」(明治6年頃)

○近き頃、世に行はるゝ物大略を挙ぐ。△新開町屋町名改め、隣町合併、町小路新開△人力車

馬車鉄道△公私学校……△博覧会△写真鏡油絵△石鹽△西洋絵扁額△同覗きカラクリ（これは少しく衰えたり）△活字版製造彫（所々に出来る）△……△犬の芝居西洋影絵△手づま……〔前同、p 259～260〕

明治5年以降、あっという間に増えた西洋画や油画を見せる覗きからくりは翌年5月にも人気は衰えなかったようである。

目をひくのは、明治6年5月条である。元諸侯の邸の大きな望火楼を工夫して、頂上から下座敷まで油画の覗きからくりを仕掛けて見物を招いたという。それは楼上から四方を眺望できたとするが、パノラマの発想が垣間見える。それは、服部誠一が「旧藩邸（藩邸新町となる）に多」くできたとし、服部や川井景一が拳螺堂サザエドウのような構造になっていたとする記述に共通するもので、旧藩邸の望火楼を拳螺堂サザエドウに見立てて興行したことがわかる。

4ヶ所の記事を概括すると、名称がまちまちであることがわかる。「西洋画の覗きからくり」「西洋のぞきからくり」「油絵の覗きからくり」「西洋覗きカラクリ」である。これらはいずれも覗きからくりの類種であることを示す呼称であり、西洋覗きからくりとは、西洋画すなわち油画を見せるからくりだということになる。「日本名所」「日光山名所其の外」がカッコ書きになっていることから、名所絵（風景）を見せるものもあったということがわかる。しかし、詳細は不明である。

それらの興行は、明治8年亥年の頃に段々に廃れ、「災い」に亡びたとするが、明治8年の「災い」は不明である。明治9年に追々に廃れたとする明治5（1872）年9月28日条と勘案すれば、明治4、5年に始まった西洋画や油画を見せる覗きからくりは、流行るのも衰退するのも早かったということになる。

さて、「附録」条にあるもののうち「西洋」を冠するものを拾えば、「西洋絵扁額」、「西洋覗きカラクリ」、「西洋衣類裁物器械」、「西洋呉服店」、「西洋骨董舗」、「西洋料理屋」、「犬の芝居西洋影絵」、「西洋紙」がある。これらは、その時代が西洋の新しいものに触れ、受け入れる文明開花の時代上にあり、「西洋」的なものに人々の注目が集まった時代だったことを示している。「西洋覗きカラクリ」もその風潮の中の商売であったということだろう。

（3）淡島椿岳の「西洋覗眼鏡」

東京においては、「西洋眼鏡」が浅草から始まったことに揺らぎは無いが、それを考案し、見世物に仕立てた人物は誰だろう。内田魯庵、淡島寒月が、浅草で淡島椿岳が始めたと記している。椿岳が「西洋覗眼鏡」を始めた経緯について確認しよう。以下のa～dの資料は椿岳の「西洋覗眼鏡」に関する記事である。引用が長くなるが、西洋眼鏡の性格を正確に捉えるためにもなるべく略することなく提示したい。

a 内田魯庵 〈八 浅草生活 —— 大眼鏡から淡島堂の堂守〉「淡島椿岳 —— 過渡期の文化が算出したハイブリッド——」⁽¹³⁾『新編 思い出す人々』

その頃（筆者注 明治2、3年頃）どこかの気紛れの外国人がジオラマふるものの古物を横浜に持って来たのを椿岳は早速買込んで、唯我教信と相談して伝法院の庭続きの茶畑を拓き、西洋型の船に

なぞら
擬えた大きな小屋を建て、舷側の明り窓から西洋の景色や戦争の油画を覗かせるという趣向の
見世物を拵え、^{こしら}、^{ナポレオン}、^{ローマ}、^{ナポレオン}、^{ローマ}の油画肖像を看板として西洋覗眼鏡という名で人気を煽
た。何しろ明治2、3年頃、江漢系統の洋画家ですら西洋の新聞画をだも碌々見たものが少な
った時代だから、忽ち東京中の大評判となって、当時の新らし物好きの文明開化人を初め大官貴
紳までが見物に來た。人気の盛んなのは今日の帝展どころではなかった。油画の元祖川上冬崖は
有繁に名称を知っていて、片仮名で「ダイオラマ」と看板を書いてくれた。泰山前に^{くず}頽るとも
ビックともしない大西郷どんさえも評判に釣込まれてワザワザ見物に來て、大に感服して「万国一
覧」という大字の扁額を揮ってくれた。こういう大官や名家の折紙が附いたので益々人気を湧か
して、浅草の西洋眼鏡を見ないものは文明開化人ではないようにいわれ、我も我もと毎日見物の
山をなして椿岳は一挙に三千円から儲けたそうだ。〔『新編 思い出す人々』、p 279～280〕

内田魯庵は、椿岳が明治2、3年頃に横浜でどこかの気紛れの外国人が持ちこんだジオラマの古物
を買込み、浅草で見世物にしたという。西洋型の船に擬えた大きな小屋を建て、舷側の明り窓を覗き
窓にし、そこから西洋の景色や戦争の油画を覗かせた。その表看板にはナポレオンやローマ法王の油
画肖像を飾り、油画の元祖川上冬崖が「ダイオラマ」と看板を書き、西郷隆盛がワザワザ見物に來て
「万国一覧」という扁額を書いたとする。

東京中の大評判となり、西郷隆盛や大官貴紳までが見物に來た。その理由を、司馬江漢系統の洋画
家ですら西洋の新聞画をだにも碌々見たことがない時代であり、当時の新らし物好きの文明開化の風
潮に乗ったのだとしている。「浅草の西洋眼鏡を見ないものは文明開化人ではないようにいわれ」る
ために、「我も我も」と見に來て、「帝展どころではなかった」混み具合で3000円を儲けたとする。

この記述から、その時代背景と共に、「ジオラマ」＝「ダイオラマ」＝「西洋眼鏡」＝「万国一覧」
ということがわかる。風景画や戦争の様子を見せる「ジオラマ」的なものを、西洋船形の小屋で覗か
せた。洋行の雰囲気醸しだしたアイディアといえる。

一方、淡島椿岳の息子寒月も「万国一覧」の興行について書いている。しかしながら、寒月は、そ
の興行のきっかけを土佐藩の山内侯が外国から取寄せられたものを譲り受けたからだとしている。⁽¹⁴⁾

b 淡島寒月 「大供」第1号⁽¹⁵⁾ 大正7(1918)年

椿岳が明治九年に万国一覧と云う覗眼鏡を浅草でやった。西郷吉之助氏が横額に万国一覧と書
いてくれた。当時のハイカラ興行で、家が広いものだから内側に司馬江漢の油絵を陳べたり、舶
来のポンチ絵を列べたり、西洋人形やカラクリ玩具を陳べて余興に見せた。陳列などもマア始め
ての事だったろう。一人一錢で三千円も儲かったと云う話だ。〔淡島寒月『梵雲庵雑話』、p 111
～112〕

寒月は、「万国一覧」は当時のハイカラ興行で、明治9年に興行したとする。西郷隆盛が横額に
「万国一覧」と書き、司馬江漢の油画、舶来のポンチ絵、西洋人形やカラクリ玩具を陳列したとする。

1人1錢で3000円儲かったとなれば、単純に3000円を1錢で割れば30万人の人出になる。大げ
さにしてもたいへんな人出となったことがわかる。この人気は、齊藤月岑が明治5年の夏に浅草寺奥

山花屋敷の脇から始まって以降、次々と出来て18ヶ所までを挙げ、また翌酉年に掛けても出来たという繁昌ぶりと繋がる。その視眼鏡の内容については以下のように述べている。

c 淡島寒月 「寺内の奇人団」『新小説』第17年第4巻⁽¹⁶⁾ 明治44(1911)年

明治の八、九年頃、寺内に云い合わしたように変人が寄り集まりました。浅草寺々内の奇人団とでも題を付けましょうか、其の筆頭には先ず私の父の椿岳を挙げます。〈…略…〉それから父は瓢箪池の傍で万国一覽と云う視眼鏡を拵えて見世物を開きました。眼鏡の覗口は軍艦の窓のようで、中には普仏戦争とか、グリーンランドの熊狩とか、そんな風な絵を沢山入れて、暗くすると夜景となる趣向をしましたが、余り繁昌したので面倒になり知人でゝもなければ滅多に此の夜景と早替わりの工夫をして見せませんでした。このレンズは初め土佐の山内侯が外国から取寄せられたもので、それが渡り渡って典物となり、遂に父の手に入ったもので、当時余程珍物に思われて居たものと見えます。その小屋の看板にした万国一覽の四字は、西郷さんが、まだ吉之助と云っていた頃を書いて下さったものだと言います。それで眼鏡を見せ、お茶を飲ませて一銭貰ったのです。処で例の新門辰五郎が、見世物をするならおれの処に渡りをつけろ、と云って来た事がありました。然し父は変人ですし、それに水戸の藩から出た武士気質は、中々一朝一夕にぬけないで、新門の云う話などはまるで初めから取合わず、此の興行の仕舞まで渡りをつけないで、別派の見世物として取扱われて居たのでした。

〈…略…〉

次に久里浜で外国船が来たのを、十里離れて遠眼鏡で見て、それを注進したという、あの名高い、下岡蓮杖さんが、矢張り寺内で函館戦争、台湾戦争の絵をかいて見せました。これは今でも九段の遊就館にあります。〔『梵雲庵雑話』、p 133～134〕

d 淡島寒月 「諸国の玩具」『趣味』第4巻第6号⁽¹⁷⁾ 明治42(1909)年

奥山の見世物の開山は椿岳で、明治四五年頃、伝法院の庭で、土州山内容堂公の持っていた眼鏡で、普仏戦争の五〇枚続きの油絵を覗かしたのでした。看板は油絵で椿岳が描いたので、確か其の内の三枚ばかり、今でも下岡蓮杖さんが持っています。其の視眼鏡の中でナポレオン三世が、ローマのパチカンに行く行列があったのを覚えています。その外廊は、斯う軍艦の形にして、船の側の穴の処に眼鏡を填めたので、容堂公のを模して足らないのを駒形の眼鏡屋が磨りました。而して軍艦の上に、西郷吉之助と署名して、南洲翁が横額に「万国一覽」と書いたのです。父はあゝいう奇人で、儲ける考えもなかったのですが、此の興行が当時の事ですから、大評判で三千元という利益があった。

〈…略…〉

又椿岳は油絵なども描いた人で、明治初年の大ハイカラでした。夫れから面白いのは、父がゴム枕を持っていたのを、仮名垣魯文さんが欲しがって、例の視眼鏡の軍艦の下を張る反故が無かった処、魯文さんが自分の草稿一屑籠って来て、其の代わりに欲しがっていたゴム枕を父があげた事を覚えています。〔前同、p 173～174〕

以上 b～d の淡島寒月の記述は、a の内田魯庵の記述と一部一致する。軍艦の形を造り、船の側の穴の処に眼鏡を^{うず}填めたこと、ナポレオン三世やローマ法王がバチカンに行く行列を見せたといった点、西郷隆盛が「万国一覧」の扁額を書いたこと、1人1銭で3000円儲かったことは一致するため、同じ内田魯庵の回想する「西洋眼鏡」興行を述べていることになる。しかし、その時期と、きっかけが異なっている。

内田魯庵は、明治2、3年頃に椿岳が「どこかの気紛れの外国人がジオラマの^{ふるもの}古物を横浜に持って来たのを椿岳は早速買込んで」としていたのに対し、淡島寒月は明治4、5年頃とし、「レンズは初め土佐の山内侯が外国から取寄せられたもので」、「土州山内容堂公の持っていた眼鏡で、普仏戦争の五〇枚続きの油絵を覗かした」とする。

「西洋眼鏡」の始まりがどちらだとわからないが、明治4年9月の『影響新聞第一号』や『浅草新誌初編』で川井景一が浅草で、「^{ラクガンクツ}楽眼窟」と「^{サザエドウ}拳螺堂」という油絵の見世物が明治4年に始まったとされていること、淡島椿岳の本名が小林であることから、明治4年に椿岳が浅草で「西洋眼鏡」を始め、「万国一覧」の看板を掲げたと判じてよいのではないか。

さて、椿岳の「西洋眼鏡」が「眼鏡」と呼ばれる所以は、レンズで覗かせるだけではないことがわかる。覗きからくりの如く、「暗くすると夜景となる趣向」、「夜景と早替わりの工夫」があった。覗きからくりの仕掛けを応用したから「眼鏡」^{めがね}なのである。

しかし、その見世物規模は覗きからくりに比べるべくもないほど大掛かりだった。軍艦の形をわざわざ作り、50枚の続き物をレンズで覗かせ、不足するレンズを注文して削り出させたほどであり、休憩所ではお茶を出したということから、その規模が窺える。小さなテーマパークの如くである。

(4) 下岡蓮杖の「万国のぞき眼鏡」

前述したように、淡島寒月が「寺内の奇人団」で「下岡蓮杖さんが、矢張り寺内で函館戦争、台湾戦争の絵を⁽¹⁸⁾かいて見せました。」と述べている。下岡蓮杖も浅草寺地内で「万国のぞき眼鏡」興行をしたのであろうか。山本笑月が浅草の名物男の一人として蓮杖を紹介し、眼鏡興行について書いている。

浅草公園の奥山時代、五人男といわれた変人が五名、観音堂の西、今の四区五区に集まって当時は有名であったが、今となるとだいたい忘れられた。

〈…略…〉

その隣の下岡蓮杖、これも九十二歳の長寿を保ったが、写真、洋画等文化の先駆者で、当時桐の大箱へ眼鏡（レンズ）をはめ込み西洋風景のクローム画を入れて「万国のぞき眼鏡」と称し、家の前へ七、八個並べて覗せていた。

〔山本笑月「その昔奥山名物五人男 変人、奇人、通人ぞろい」『明治世相百話』1983年（初版1936年）、中央公論社、⁽¹⁹⁾p 288～289〕

山本笑月によれば、蓮杖は桐の大箱にレンズを取り付け、西洋風景のクローム画を見せていたことになる。箱を7、8個並べておいたとあるから、人々は歩きながら箱の中を覗いていったということになる。看板は「万国のぞき眼鏡」、これも「西洋眼鏡」の一種だといえる。

(5) 浅草、五姓田芳柳と新門辰五郎の出した見世物

一方、浅草では明治7年に、五姓田芳柳の描いた油画を見せる油画興行が新門辰五郎を興行主として行われた。その時の経緯や興行内容を、平木政次が『明治初期洋風画壇回顧』⁽²⁰⁾に述べている。平木政次は五姓田芳柳の弟子にあたる。

それによれば、明治6年に五姓田芳柳は横浜から浅草へ引き移った。それは、芳柳が東京に出て一般の人に油画を見せたいと浅草の新門の辰親分に相談、辰五郎が小屋の都合を引き受けた〔『明治初期洋風画壇回顧』p13〕ためである。それを受けて、「六年の押つめまでに、門人を督して、大小十五枚の畫を作り上げました。其の図柄は、一般の人に説明なく共判り易い様に撰(原文まま)みました。」と作成し、それを持って家族と平木と共に浅草奥山の家に入ったという。

五姓田芳柳が新門の辰五郎と組んで興行したのは、「油画興行」である。前掲の『明治初期洋風画壇回顧』23ページにその興行の引札が掲載されている。そこには八百屋お七や忠臣蔵の役者絵が描かれ、「諸地画」、「當世役者似顔」、「古代史人物」などを見るとある。興行は明治7年4月31日から行われた。ただし、その油画は、カンバスではなく、カンレイシャに泥絵具で描いたもので、その上にニスを書いて「油絵の様に見せた」〔同書、p24〕もので、額面が縦六尺横三尺、半身像は二尺幅の大きさというから、全身像はほぼ畳1枚分だったことになる。

この油画を見せる興行は、レンズを通して見せたかどうかは定かではない。芳賀徹は「ジオラマ」のようになっていたという。

芳柳は鞠躬如としてそれ（筆者注：五姓田芳柳は明治7年天皇御影制作を下命された）に応じたにちがいないが、またその一方では、このおそれ多いはずの仕事のかたわらで、浅草の俠客新門辰五郎と組み、観音様の境内にその名も珍奇な「ジオラマ」（diorama＝泥絵具などで背景の絵をかき、そのまゝに人形や剥製その他の品物を配して一幅の立体的な情景をつくった見世物。フランス人ダゲールの創案だという）の小屋をだし、平気でテラ銭をかせいだりしていたのである。〔芳賀徹「牛鍋」と「光線画」』『明治維新と日本人』⁽²¹⁾、p253〕

芳賀によれば、泥絵具で背景画を描いた前に人形や剥製を飾ってジオラマ（dioram＝ダイオラマ）風の場面を作って見せたということである。見せたものは「西洋眼鏡」と同じように油画でジオラマ風であるが、レンズを通して覗くという記述がないため、「西洋眼鏡」と同類かどうかは不明である。

その評判は、『「今にも動き出しそうだ』とか『着物は、ほんものゝ切地だらう』とか『實に油畫と云ふものは不思議な畫だ』と口々に驚きの聲を發して居りました。』〔平木前掲書、p23〕というものだった。油画で描かれた人物が生きているがごとくであり、着物は本物のように見え、これが西洋の油画かと驚き、評判になったというのである。

油画の珍しかった時代に、人々は油画を見に奥山に出かけて来た。西洋の画法は人々にとって、斬新であり、芳柳の目論むところは当たったと思われる。

東京における「西洋眼鏡」についてまとめておく。東京で興行された「西洋眼鏡」の類には、淡島椿岳の西洋の景色や戦争の油画を見せるもの、下岡蓮杖のクロム画、五姓田芳柳の役者似顔を描いた

油画（絵）興行がある。東京に明治5年以降次々と建てられたのは、椿岳のものを真似たものと思われる。

三者に共通することは、油画を見せ、休憩所でお茶を出したことであり、見世物小屋というよりは、西洋の絵画サロンを模したように思われる。加えて、椿岳が軍艦を模し、船窓から覗かせた様子は、小さなテーマパークの如くだったのではないか。

5 「西洋眼鏡」と「元祖大眼鏡」

さて、明治15年以降、「西洋眼鏡」に関する記事は、「元祖大眼鏡」に変わる。「元祖大眼鏡」とは、石井研堂「覗眼鏡の始」『明治事物起源』⁽²²⁾下巻によれば、「元祖大眼鏡」はそれまでの「西洋眼鏡」の目先を変えたもので、「からくり」とは異なり写真や油画を見せるものだとある。すなわち、「西洋眼鏡」から「元祖大眼鏡」に呼称が変わったものである。『有喜世新聞』明治14年12月27日号は「写真絵油絵を大きく見せたは東京では爰が初めてといひ観場の位置も申し分ない」ので「元祖」の名が付いたと説明する。「元祖」と名付けるには、他所にも同じようなものが造られたため、差異化を意図して名付けたのだろう。

以下はその「元祖大眼鏡」の改装開店、ないしは移転新装開店ともいうべき記事である。

明治15年1月1日に、東京浅草公園地にて、「元祖大眼鏡」が「新装開店」した（『有喜世新聞』明治14年12月27日）。その新装開店の理由は「浅草奥山の元祖大眼鏡は日々看客も多くあるので、コルム石版絵などのありしを引替各国名所の油絵多く新に加へたるよしなれば、一層見栄がありませう」（『東京絵入新聞』明治15年4月1日）にあるように、観客が日々多くあるため、新たに目先を変えて見栄えがすることを狙ったものである。

先の『有喜世新聞』広告に「弊場儀、修覆中休業致居候処、今般修繕落成致候間、来一月一日より○グラント氏の肖像○ニューハウンドリランドの怜犬溺死人を救ふ図○「ヤソ」磔殺せらるゝ図、其他西洋各国支那印度の風俗又名所古跡風景合せて五十有余枚新規油絵を描せ、御覧に入候……本戸銭は大人金二銭 子供衆同一銭 但御休息の時、煎茶差上候 浅草公園地奥山花屋敷植木屋六三郎方南へ隣 元祖大めがね場」（『有喜世新聞』前同）とある。新規油画50余枚を描かせて見せるとするのだが、各国の名所旧跡のみではなく、キリストの磔の図や、「ニューハウンドリランドの怜犬溺死人を救ふ図」という事件を絵に描いたものを見せるといふ。油画50余枚を覗いて見せたとはかなり規模が大きいものであると同時に、休憩時には煎茶を出すということから、見世物というよりは娯楽場的な意味合いを持つ見世物だったことが窺える。広告主が「元祖大めがね場」とあることから、会場となる小屋の名称が「元祖大めがね」であったことがわかる。

「元祖大めがね場」は、その後も油画を入替え、新たな出し物で客の再来場を促している。明治16年4月1日にも油画の入替えが行われた。「浅草奥山の元祖大眼鏡に於て吉原にて美人の名を得たる仲ノ町引手茶屋九伊勢屋のおマメを始め有名の娼妓の肖像を新規油画に描かせ、明一日より遊客に覗かせるとのこと」（『朝野新聞』明治16年3月31日）とあるように、有名娼妓の似顔絵を描いたものを見せた。また、10月には俳優の似顔絵を見せるようになっている（『朝野新聞』明治16年10月21日）。

明治18年には、浅草奥山にあった「元祖大眼鏡」が奥山取払いのため、浅草公園第六区に引き移り、油画の新規入替え移転開業が行われた〔『自由燈』明治17年12月27日、『読売新聞』同年10月15日〕。

『郵便報知新聞』は、「是まで浅草奥山にありし元祖大眼鏡は今度同公園第六区即ち新地第二号へ引移り西洋各国其他の新図を取寄せ来一月一日より眼鏡茶屋を開業し一人前二銭にて各図を見物させ煎茶を供すといふ」〔『郵便報知新聞』明治17年12月28日〕と伝える。

「元祖大眼鏡」の油画入替えての改装開店は、明治19年5月15日『東京絵入り新聞』記事が最後になる。改装開店は1年から1年6ヶ月程の間隔で行われているが、その時は、「元祖大眼鏡にては是迄の品は残らず取替皆新規の油^{〔原文ママ「さし替え」カ〕}とさし二十八ヶ所の目鏡を見せ…」とあるように、油画の総入替えが行われた。その興行は5月16日から行われた。その後に「元祖大眼鏡」開店を伝える情報があまりないことから、それ以後、大掛かりな宣伝をせずとも人が集まったのか、段々に縮少の方向に転じたのかのどちらかだと思われる。

6 「西洋眼鏡」の特徴と魅力

それでは、「西洋眼鏡」の特徴と魅力についてまとめたい。それはどんな構造を持ち、何を見せ、人々は何に魅かれて見に行ったのであろうか。

(1) 西洋眼鏡^{めがね}の構造

まず、どんな構造になっていたか。先に見た資料をまとめれば、①浅草には、^{さざえどう}拳螺堂のようになっていて段々に階上に上がっていく構造のものや、②軍艦を模して船窓を覗かせる趣向のものがあつた。③旧藩邸などやその望火楼が利用される場合もあり、④絵を見るための観室は玄関を設えた小屋や旧藩邸の中にあり、⑤その玄関は白塗りの壁や西洋の草花が植えられていることもあつた。⑥観室の中に入ると、室内には数尺を隔てて、数個のレンズがあり、観客は歩きながら廻ってこれを見る構造になっていた。⑦覗き穴、すなわちレンズは大蛇の眼のようで、片眼ないしは両眼で見る大きさだった。また、⑧休憩所があり、お茶を供していた、ということになる。

(2) 西洋眼鏡が見せたもの

浅草での「西洋眼鏡」の始まりは明治4年である。淡島椿岳が、外国人が持ち込んだジオラマ^{ふる}の古物を真似たか、土佐の山内容堂が持っていた「普仏戦争の五〇枚続きの油絵」を覗かせたことに始まる。また、浅草では明治4年、西隅には^{らくがんくつ}楽眼鏡^{さざえどう}があり、東には^{さざえどう}拳螺堂があつた。楽眼鏡は、東都西洋眼鏡の元祖だといわれた。

淡島椿岳の「西洋眼鏡」は、西郷隆盛がワザワザ見物に来て「万国一覽」という扁額を書くほど話題になった。それは、ジオラマ（ダイオラマ）を模したものであり、覗きからくりの如く夜景を見せる仕掛けを持っていた。当初見せたものは、ナポレオン三世やローマ法王がバチカンに行く行列、ロンドン、パリ、ロシア等の風景、戦争の風景、人物を描く油画だった。

服部誠一『東京新繁昌記』初編（明治7年）によれば世界の新奇、万国の風俗と共に、博物館や大

病院の図があり、最後に「奇中の奇、新中の新」と服部が表現する色の白い弁天が裸でベッドの上に寝ているものもあったと。

明治7年以降は、五姓田芳柳の油画（絵）興行が役者似顔絵を描いていたように、吉原の娼妓や、人気俳優の人物画が描かれるようになっていた。それは、明治15年以降の浅草「元祖大眼鏡」の改装開店の油画の掛替えに顕著に現れる。

（3）浅草「西洋眼鏡」の盛衰

世界万国の様子を見せる「西洋眼鏡」は明治4年に始まった。齊藤月岑は、浅草寺奥山花屋敷の脇から始まった「西洋眼鏡」が、神保町二丁目、神保町一丁目、増上寺山内二ヶ所、芝太神宮、田村小路、烏森稻荷社西道、芝日陰町、浅草寺淡島社後、九段坂上、湯島天神下、御蔵前床店、麴町平河天神内、下谷御成道西側、四谷あらき横町、淡路町、車坂町、と続々と18ヶ所に出来、その他に翌酉年に掛けても出来たという。その流行の様子は、淡島椿告の「万国一覧」が評判となり、1人1銭の見料で3000円儲けたという話でもわかる。

「西洋眼鏡」は東京のみで興行され、流行したわけではない。大坂、京都、名古屋などでも興行されている。またたく間に日本全国に拡がり、興行が打たれた。

しかしながら、その衰退も早かった。齊藤月岑は明治9年以降下火になったとするが、資料的には明治15年以降下火になって行ったものと思われる。明治15年から明治19年にかけて、浅草での「元祖大目がね」の移転新装開店、改装開店が新聞記事に見えることから浅草では命脈を保っていたのは確かであるが、随筆類や回想録には見えなくなるため、あまり話題となる存在ではなくなっていただろうことは推測できる。明治25年4月の『読売新聞』「目鏡」記事以後その存在を裏付ける資料が管見の限りでないため、数年のうちには廃れたのだろう。

（4）「西洋眼鏡」を覗く理由

「西洋眼鏡」がどのようなものかわかったところで、その盛衰について若干の考察を加えたい。「西洋眼鏡」の急激な流行は当時の人にとって斬新で、関心を引くものだったことを示している。

それは明治4年に始まった。見料は総じて最初は1銭、のちには2銭と安かったこともあるが、最初に話題になった時には3000円を稼ぎ、単純計算すれば30万人の人出となり、その数でもいかに流行ったかを知ることができる。

「西洋眼鏡」を覗く理由が、『朝日新聞』明治18年4月9日記事に掲載されている。それは、^{のぞ}覗き眼鏡商が警察に取り調べられたとする記事中にある。子供達が従来の覗き眼鏡（覗きからくり）と比べて、「西洋眼鏡を見やうアレには外国の都府の図や戦争の図や蒸気船は航海る途中で難風に遭ふてゐる図なぞがあつて見ない處を見たり知らない處を知たり何かに益がある事があるから忤」と言ったとある。つまり、覗き眼鏡に比べて、見たことがない所や知らない所を知ることができ、何かに益があるからだと言っているわけである。

以上の理由は、⁽²³⁾菊池三溪が書いた「唐人鏡」の魅力と相重なる。「唐人鏡」は西洋の風景を描いた絵を「玻瓈鏡」の中に置き見せた店であり、「西洋眼鏡」に相応する。

西洋諸州の名区勝壤，山川城郭，以てその鳥獸草木に至るまで，目未だ嘗て慣熟せざるの物を模写し，これをその鏡中に置く．照らしてこれを視れば，神彩生動し，模写真に逼る．人をして躬をその間に置きて，親しくその景を視るが如くならしむ．また奇構なり．日まさに午にならんとして，観客蟻集す．各一鏡に就きて視る．その楼閣の重畳する，三層なる者あり，〈…略…〉
 一睹して^{いつと}竜動府^{ロンドン}たるを知る．その長橋水に俯し，城郭天に聳え，〈…略…〉．しかもその価を問へば，則ち^{わづ}厘かに一銭のみ．謂ひつべし天下の壯観にして，天下の至廉なる者と．〔菊池三溪「写真鏡舗」〔『西京伝新記』，2004年 岩波書店，p 278～279〕

それは、数十のレンズを持ち、それを覗くことで西洋諸州の名勝地、ロンドンやフランスの景色を見ることができた。人々がこれまで余り見たことがないものを模写し、それを鏡（レンズ）の中に置いて見せたのだという。それは生動し、あたかも写真のように見えたという。それにもかかわらず、その価格は僅かに一銭で「ヤスイモノ」だとする。ゆえにであろう、「人をして躬をその間に置きて、親しくその景を視るが如くならしむ。また奇構なり。日まさに午にならんとして、観客蟻集す」という盛況であった。「西洋眼鏡」の魅力は、リアルに描かれた見知らぬ世界の景色や名勝地をレンズを覗いて見ることで更に活きているように感じさせる所にあったということになる。

また、油画の珍しかった時代だったことも見逃せない。五姓田芳柳の油画興行を企画した如く、西洋画が一般の人々にとって珍しく、その質感が活きているように見えるというほど驚きを与える時代だった。

「西洋眼鏡」は、お金も掛けず、手間も掛けずに珍しい世界各国の様子が見られることに魅力があったとともに、油画の如く仕立てた人物画は活きているが如くに見えることにも魅力があったといえよう。

「西洋眼鏡」は「西洋」を冠する商売の1つであり、浅草の見世物師たちが時代の流れにのって始めたものと思われる。開国を経て「西洋」に眼を向け出した時代であり、人々が外国そのものに魅力と興味を抱いていたから、文明開化の新風俗として「西洋眼鏡」は一時の流行になったのであろう。

なぜ、人々は「西洋眼鏡」を覗いたのか、その理由には、以上の「西洋眼鏡」の魅力、文明開化の時代だったということに加え、加藤秀俊がいうところの「代理⁽²⁴⁾経験」、「場所経験」性にあるといえるのではないか。加藤は「代理経験」を具体的・物理的経験ではなく、シンボルという代用品によって経験を蓄積することだと説明し、「場所経験」は特定の場所に行くことの「代理経験」だとする。「西洋眼鏡」が「世界の新奇」を見せて「地理的「現地」を経験させよう」としたという。実際にその場所へ行かなくとも、景色を見ることで、あたかも行ったような感覚を持つことができ、それが時代の流れに乗る感覚に繋がったといえるだろう。

それではなぜ「西洋眼鏡」は廃れたのだろうか。その理由については、詳細に検討をすることを要するが、新たな見世物興行が考案されたため、世間が文明開化、西洋ということを意識しなくなったため、油画の存在が一般に普及したことなどが考えられる。一方、見世物史上では、「西洋眼鏡」の時代の次に「パノラマ」の時代がやってくる。「西洋眼鏡」が廃れた理由を考えることは、次なる社会の変化を知ることにもなる。次稿においては、「西洋眼鏡」の衰退とともに、「パノラマ」の流行と盛衰を考えることにしたい。

最後に、「西洋眼鏡」が明治4年から瞬く間に流行し、約20年ほどで廃れたことを通して、明治初期という時代の特異性と、その時代のうねりを捉えることができたことを確認しておく。

注

- (1) 加藤秀俊「パノラマ・絵ハガキ」『見世物からテレビへ』1965年 岩波書店。なお、同じような混同は、槌田満文「覗機関」『明治大正風俗語典』(1979年 角川書店)、湯川豪一「のぞきからくり」『明治ものの流行事典』(2005年 柏書房)、同「覗きからくり」『図説明治事物起源事典』(1996年 柏書房)等でも行われている。
- (2) 坂井美香 2009年「覗きからくりとは何だろう——日本、西欧、中国——」『歴史民俗資料学研究』
- (14) 神奈川大学歴史民俗資料学研究科。
- (3) 岡丈紀著述、猩々暁斎画『浮世機関西洋鑑』1873年 萬笈閣。
- (4) 橋爪錦造編集 應需芳年画『寄笑新聞』第七号 1875年 寄笑社。
- (5) 應需芳年こと、月岡芳年による。
- (6) 増山守正編、久保田米僊画『明治新撰西京繁昌記』1877年 京都書房 二書堂合梓。
- (7) 「西洋眼鏡」服部誠一『東京新繁昌記』巻一 1874年 山城屋政吉。
- (8) 前注に同じ。なお、同書は、1925年に聚芳閣から再版されている。
- (9) ただし、実際にこの4都市のみで興行が打たれたと言い切ることはできない。筆者が参照した資料に地方の資料が少ないためである。
- (10) 日耳曼とは、^{ゼルマン}ゲルマンの漢字表記であるという意見もあるが、服部誠一が『東京新繁昌記』巻一で「日耳曼戦争」を「西洋目鏡」が見せたとしていることから、日耳曼とはビルマの漢字表記だと思われる。なお、ビルマ戦争は、1824年から86年にかけてイギリスとビルマの間で行われた戦争である。
- (11) 内田魯庵「淡島椿岳——過渡期の文化が算出したハイブリッド——」『思い出す人々』1994年 岩波書店、265頁。「淡島椿岳」の初出は、大正5年『きのふけふ』である。
- (12) 斎藤月岑『武江年表』、嘉永3(1850)年に一度完成したものの、後に明治維新の変革を迎えたために、追加の記事が加えられて明治11(1878)年1月に明治6(1873)年までの分が完成された。明治15(1882)年に刊行された。(金子光晴校訂、平凡社東洋文庫)
- (13) 注(11)に同じ。
- (14) 土佐藩15代藩主 山内容堂(1827-1872年)と思われる。
- (15) 淡島寒月『梵雲庵雑話』1999年 平凡社 所収、p 111-112。
- (16) 前注に同じ、p 133-135。
- (17) 前注に同じ、p 173-174。
- (18) 下岡蓮杖は、浅草で写真屋を営んでいた。
- (19) 山本笑月『明治世相百話』、初版は1936年第一書房である。
- (20) 平木政次『明治初期洋風画壇回顧』1936年 日本エッチング研究所出版部。
- (21) 芳賀徹『明治維新と日本人』1980年 講談社学術文庫。
- (22) 石井研堂は明治14年6月『東新』第250号 記事を引用紹介している。石井研堂『明治事物起源』下巻 1944年 春陽堂、p 1236。
- (23) 菊池三溪『西京伝新記』、日野龍夫他三名校注 新日本古典文学大系明治編1『開花風俗誌集』2004年 岩波書店に所収。『西京伝新記』には、菊池三溪によって明治7年の京都新京極の風俗が書かれ、「写真鏡舗」(『西京伝新記』、p 277)、「唐人鏡(とうじんめがね)」(同、p 278)が登場する。「写真鏡舗」は、俳優や舞女、某知事などの「写真牌」を見せて売る店である。
- (24) 加藤秀俊「パノラマ・絵ハガキ」『見世物からテレビへ』1965年 岩波書店、p 44-45。